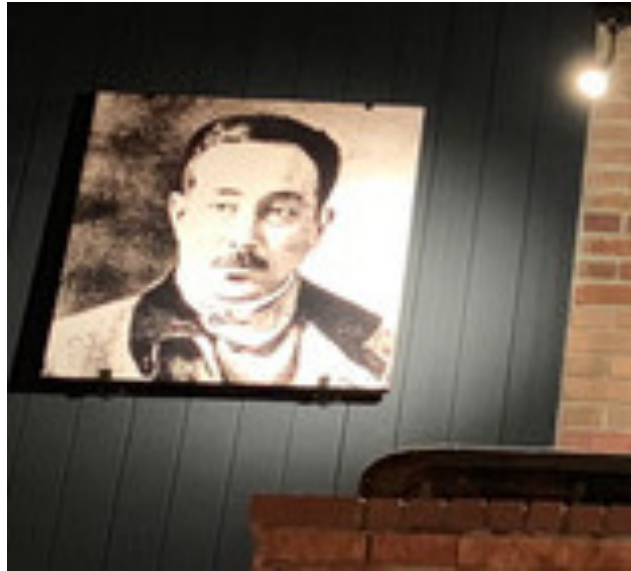


土香る会

読書会感想文集 Vol.38



2021年10月

【目次】

第41回読書会(2021.10.09)

有島武郎『「死」を畏れぬ男』・・・P1～

※ 土香る会が毎月行っている「読書会」に参加した方々が寄せた、感想文と報告を掲載しています。

Vol.29からは、有島武郎の作品でまだ読んでいなかった小説の読書会、
いわば第4シリーズの読書会感想文集となりました。

● 問合せ先／土香る会事務局(有島記念館内)0136-44-3245

第41回読書会のまとめ

『「死」を恐れぬ男』

2021年10月9日

読書会参加者4名+リモート参加1名+感想文のみ参加2名

感想文提出7名

1. 作品の特徴

この作品の特徴は一人語りだという感想がありました。その形式には作者の傀儡としての役割を演じさせることができる半面、与えられた役割以上に自ら作中で勝手に行動し始める自由が与えられていないという長短両面があると言います。講談調の一人語りを面白がっていたのですが、言われてみればその通りで、そういう捉え方があるのかと新たな発見がありました。

別の人は初めに読んだ時は腹が立ったと言いました。理由を訊かれて、あとから考えると腹が立つほど面白かったとのこと。よく分かる、とすぐ反応した人もいれば、今一つよく分からないという人もいました。味のある表現だと思うのですが、自分の感じたことや考えた事を伝えることの難しさを感じます。読書会はいろんな事を考えるきっかけになります。

昔も今もギャンブラーは相場師を含めて縁起を担ぐものだという意見が出ました。株を扱うのはやはりギャンブルであり、結局は興行元が儲かるようにできているので気軽に手を出すのは危険だと結論が出ました。

饒舌に語る四十男の口調はさながら落語家か講談師の話芸のようだという感想がありました。講談を聞いているようだという人はもう一人いて、そういう調子で書かれているせいか、作品の中で当時使われていた決まり文句や言葉遊びを見つけています。『奇跡の咀』にも同様の言葉遊びがあったそうですので、感想文をご覧ください。

2. 主人公の人物像

相場で儲けることより、相場というビジネスでの冒険、チャレンジこそが生き甲斐となっている人物だという解釈がありました。大富豪か身の破滅かというスリルに虜になってしまうのでしょうか。

有島が最も嫌悪する人間を表していると考えた人がいました。父・武は株をやっていたし、武郎自身は農場解放をしたが、これとてギャンブル的な行為ではないか。ギャンブラー的な血が有島(家)の中に流れていて、武郎は自己嫌悪していたのではないか、という主張でした。

主人公がさりげなく語っている性格をまとめると循環気質性格の特徴と考えられる。この描き方は有島自身の鬱の気配が反映されているのではないか、という医学的見地からの分析もありました。

題名の『「死」を恐れぬ男』とは畏れるべき対象である「死」を畏れない人物であり、そのような人物として描かれていると考えた人もいました。その根拠は有島が水野仙子に宛てた書簡だそうです。何と書いてあったかは感想文をご覧ください。以上が具体的な人物像です。

それに対して、主人公の相場師は、「死」そのものに対して極めて鈍感になっている日本社会を背景に、生きることと死ぬことのかげがえのなさを知らない日本社会の象徴として描かれていると

いう解釈もありました。抽象的な主人公像です。

違う解釈をご紹介します。主人公は誰かというものです。

本作は語り手と聞き手がいるだけの作品ですが、一人称が二人称に入れ替わってゆくように、聞き役があたかも主役のようになる表現の巧みさが有島にあるという感想がありました。主人公は語る一方の相場師の「彼」ではなく、ひたすら聞かされている「私」だという見解ですが、そうなる「彼」は語りながら「私」に踊らされていることになりすね。その「私」とは誰なのかを考えた人もいました。何と、作者の有島自身であり、読者であり、時代の渦潮に目が眩んでいる市井の民でもある、というものでした。

3. 時代が主人公か

程よい口調に釣られて作品の中に入れば、時代の潮流（青島占領、シベリア出兵、米価高騰、生活苦など）に巻き込まれていく社会心理の怖さに気付かされるとの感想がありました。鳴門の渦潮をそのすぐ脇で作者が見ている感じだとのことでした。また、時代の潮流に巻き込まれていくのはどの時代にもあることで、現代においても例外ではないとのコメントもありました。

青島の話が出たところで、別の人から、総理大臣経験者である石橋湛山が東洋経済新報社に勤めていた頃「青島は断じて領有すべからず」と題した社説(T3)を書いたことが紹介されました。

題名に「死」と括弧書きしてあるのが気になった人がいました。米相場の話に戦争や死に関することが混ぜ込んであるのに注目して「死」を「自分以外の者の死」と解釈し、戦争や軍隊というテーマが相場の話に隠されていると考えたそうです。

他には「死」を畏れぬ男は、天皇を頂点とする大日本帝国そのものを指すとも考えられるという解釈も出ました。

4. 涙の訳

作品の最後で、相場師が指でつまんで食べた餅菓子の餡が耳たぶに付いているのに気付いた「私」が思わず吹き出そうとしたが、咄嗟に出たものは笑いではなく涙だった、という場面があります。参加者の皆さんはこの部分が作品の肝だと思っているようです。でも、なぜ涙なのか答えは難しそうです。

例えば、具体的に何か悲しんでいるわけではないという感想がありました。有島が書いていくうちに悲しくなってきたのだろうし、それは読み手の感情でもあると言います。また、社会の中にある人々に対する悲しみでもあるが、人間の持っている悲しさが時代の中で浮き彫りにされているように思うという感想もありました。

こんな感想はどうでしょう。自己嫌悪から来る涙ではないか。ギャンブル的な性格が自分で悔しいし、悲しいからだろう。また、やり切れない気持ちから出たポロポロ涙であったのではないかとこの感想や、話し手の「彼」が感じる恐れはこれだと聞き手の私が判断したものと「彼」自身が感じる実際の恐れレベルが違っているために、私は「彼」が必死に動き回っている様子に涙が出た

のではないかという感想もありました。

まだあります。主人公は天皇を頂点とする大日本帝国そのものを指すと考えた人がいたことを先に紹介しましたが、その人は大日本帝国のその先に待つものが破滅だと予感するので涙が出たのではと考えました。もう一つ違った解釈です。作品中にある腹の底と上澄みという対比から、相場師は内面に人間関係の齟齬を感じていると思われ、その心の闇によって彼は死へとむかっていくと思えるので、畏れる準備すらしないうちに彼が「死」に向かうことを思うと私は涙せざるを得ないというものでした。

一般的な話として、大人が泣くときは悔しいことがあった時だとか緊張が解けた時もそうだという意見がありました。また、アニメでも映画でも小説でもじわーっと泣けるということには皆さん同感です。

5. 創作ストーリー

作品をきっかけにして自分で話を作った人がいました。ある人のは、相場師と高島嘉右衛門が縁起を巡って会話する話でした。縁起担ぎがこの作品の鍵ではないかという意見が出ました。別の人は、北見枝幸（えさし）の砂金を巡る山師の物語です。史実を脚色して書いたそうですが、砂金の発見者である山師は仕舞には身を滅ぼすことになったそうです。

相場師の一人語りから閃いたようです。フーテンの寅さんの語りで出来ています。農場解放が出てきたり俄成金の話があったりしますが、最後は、心中してしまっただけで相互扶助はどこへ行った、勿体ないというところで終わるという結構皮肉の利いたストーリーです。よくこんなに考えているような要素を詰め込んだものだと感心しきりでした。

こういう創作物をきっかけにして、参加者の感想文の傾向が最近2つに分かれてきたという話が出ました。有島の作品に言わば直線的に入っていった解釈しようとするタイプと、作品中の何かに触発されて自分で創作ストーリーめいたものを書こうとするタイプです。その人によって向き不向きがありますし、いろんな感想文があって幅が広がっている感じがしています。

6. 作品の意図

最後に有島自身による作品の意図に触れます。先に出た水野仙子宛の書簡には「一番嫌いな男の典型を丸彫りしてみたいと思った」と書いてあるとの情報が出されました。作家が意図を公にすることは読者の自由な読み方を妨げると思っていたらしい有島が作品の意図を書くのはとても珍しいそうです。

社会の矛盾に視線を注ぎながらそれを直接批判的に書くのではなく、その中で生き、そして死んでいく人間を描き分けようとした作品が有島にはあって『かんかん虫』や『お末の死』がそれに当たるが、今回の作品もその中に含まれるという指摘がありました。

また、その2作品は魯迅が翻訳して中国国民に紹介しています。魯迅は日本に留学していた時は医者を目指していましたが、中国に帰ってからもっと多くの国民の意識改革をしなければ国の改革ができないと考えて作家になったそうです。その2作品もそういう意図のもと、日本でも中国でも

人々に受け入れられるものとして翻訳したということも併せて紹介されました。

(文責：井上剛)

※参加者：磯野浩昭、磯野美和、井上剛、梅田滋、菊地寛(ZOOM) (五十音順)

※感想文のみ参加：高木直良、玉田茂喜

※以下感想文の掲載順は、概ね当日の発表順です。

熊は駄目（死をも恐れぬ男）

Ish.

死をも恐れぬ男とは、勇敢と言う意味ではない。人の死を何とも思わぬ、心の貧しい、利己的な人間を指している。人の死、不幸な状況を、ギャンブル（先物取引）に優位か不利か、縁起が良いか悪いか、彼は、それだけに支配されている。そして、面白いのは縁起を担ぐ表現である。福耳（常に触って大きくしようとしたり）、自殺に立ち会った後の「縁起の悪い車」を避けたり、列車に乗っていた少女が大声で泣いたから大雨になり、利益に繋がったと信じ、菓子を振舞ったりと、かなり滑稽な人間を描いている。しかし、これは有島が最も嫌悪する人間を表していると同時に、ブルジョワジー有島の蕩尽的性格を内包している様にも見える。自己に潜む嫌悪感が、涙を誘った、そして、どうして良いか心の整理がつかない何故、涙がでたのか、それすら、わからない。心の闇。小説の最期に語られる文章が、この作品の全てを物語っている。

「さういつて彼れは～彼れが指で摘んで喰べた餅菜子の餡がその大事な耳たぶに少しばかり喰付いてゐた。私はそれを見ると思はず吹出さうとしたが、咄嗟に出たものは、笑ではなくて涙だった。今でもその時の心持ちが自分ながら分らない。・・あの「死」をも畏れない勇敢な男はそのとき戦場に向かつて驀地に駆けさせていたのだ。

時代が移り・・・<相場師の現代>

現代と昔では株式市場（先物取引）の様相はかなり違う。コンピュータシステム（以降CS）が全てを仕切り、人はそれを管理する。管理といっても、アルゴリズム取引（システムトレード）に全てを委ねている。懐に多少の金があり、性能（スペック）の高いパソコンと高速回線、少しの知識があれば、誰でも取引は可能である。当時のメディア（新聞等々）によって、人間が数字を割り出し、または経験から判断していたものが、今や、気象衛星の技術革新によって、数か月、いや数年先の天候まで予測できるまでに進歩している。そして、株式CSは既に人間の管理の範疇を越え、人の手の届かない境界に達している。株取引が一人歩きすることで、懸念されるのが、株の大暴落である。果たしてこれは、真実なのか、システムのフェイクなのか？それは誰にも、わからない！。株式CSには、血も涙も縁起担ぎもない。あるのは人間が及ばぬ計算能力と予測の正確さを持ち、意思を持たない、冷たく硬い鉄の塊である。

<相場師> 「すみません。ちょっといいですか？株取引に縁起の良いものは牛の頭、頭骨だと聞いたのです本当でしょうか？また他に株取引に関して縁起の良いもの、悪いものなどありますか？」

<高島嘉右衛門> 「ちょっと待ってください。今、サイコロで占いますから。それはいわゆる「ブルマーケット」（上げ相場）から来ているのかと思います。ブルとは雄牛のことで、雄牛の角が上にあがっていることから、または雄牛は角を突き上げる動きを見せることから、上げ相場を意味するようになったようです。反対の下げ相場のことは「ベアマーケット」と言います。ベアは熊のことで、熊が腕を上から下に振りおろすことから下げ相場を意味するようになったとのことです。こ

こから考えると熊関連のグッズは縁起がよくないかもしれません。ただ、空売りをしている場合は真逆になります。」

<相場師> わかりました。熊は駄目ですか。そうですかそうですか。やっぱり熊ですか。そうですか。そうでした。いや、ありがとうございました。我が相場師の家系ではとにかく、縁起を担ぐことが、家訓になっているもので、本当に参考になりました。ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

.....

あー牛かーっつ。やっぱり、牛にすりゃよかった。ぶつぶつぶつ.....畜生・・牛か・・畜生目・・

.....

「死」を畏れぬ男 ～迷信と涙の理由～

ism.

<迷信>

昔々、北見枝幸に菅原栄之進という男がいた。細々と小漁師でやっていたが、そんじょ其処らの貧乏根性で生きる奴らとは違ふと気張り、いつかまた竜宮城のような生活をしてやると目の奥では突拍子もないものを見ていた。

枝幸がゴールドラッシュに沸いたのは明治 31 年であった。栄之進のドリームとは比較にはならないが、湯水のごとく湧き出る金の大嵐を、心の奥底で誰もがその再来を待ち望んでいたのは確かだった。宵越しの銭のことなんぞにいつまでも執着しているようじゃ、死神に魂を売ったも同然と周りからは相手にもされなくなった。ホタテが不漁であった明治 38 年の 12 月 20 日、栄之進は正月も越せないんでは死んだも同然、死神をも畏れず独り川筋をたどり沢に消えて行った。ホタテが採れんと言って海深くに潜るのも、砂金を探して足を滑らし沢に落ちて獣の餌になるのも同じだ。生きるか死ぬかを掛けた栄之進の昔取った杵柄ならぬ山師の勘は冴えわたり、砂金の兆候を見逃さなかった。砂金粒に満たされた滝壺で、栄之進は馬酔木（あせび）を喰らった馬のような足取りで滂沱の涙を流した。八十土砂金山の序の口の発見であった。それからはしょっちゅう滝壺に行っては砂金を持ち帰り、半端ない羽振りのいい生活をしていたが、怪しまれあとをつけられた。ちょっとした保証で鉱山の受け渡しを迫られ権利は栄之進に残らなかった。その保証も堅実に生きる資金にはならなかったのはご想像のとおりである。

人には煩惱があるというが、この場合の煩惱はシンプルである。だいたいこういった場合の行く末もレールが引かれているようにわかり易い。頼るものもなく迷信に頼り、ふざけたことも信じてみたり。

作品の中の利が得られる縁起担ぎ（迷信）にはどんな意味があるのか。

経験による伝承から、それをしないと生きるには困らないが、巡り巡って自分に徳が得られるというようなもの、

伝統や風土から来るものもあるのではないか。風習やしきたりで、それをしないと生きるには困らないが、教養がないように見えたり、行儀が悪いように思われたりするものではないか。

なんでも脳の中には迷信を信じやすいプログラムがあるらしい。小児の発達の中に、就寝儀式といって身の回りを整えたり、ぬいぐるみやお気に入りのおもちゃの配置を整えたりというのがある。生物学者の E. O. ウィルソンは、科学で証明できなかった時代に超自然現象を信じて受け入れることによって、大きな恩恵がもたらされていたと言っている。人類学者のパスカル・ホイヤーは、宗教の成り立ちについて、自分達ではどうしようもできないものを、何とか制御したいという切羽詰まった思いから、自らが想像した神々と交渉し始めたと言っている。これらに当てはめてみると、縁起担ぎする「彼」の心境も理解できる。

<何度も引っ張られる愛されていない耳たぶに餅の餡と涙>

聞き手の涙は、やりきれない気持ちからポロポロ涙であったのではないか。何がやりきれないかと

いうと、聞き手の基準ではあるが、彼の過去からすると人格が崩壊しかかっている、あまりにも馬鹿げている、地に足もつかず物事を深く考えられないでいる、非人間的な感情しか持ち合わせていない「彼」を憐れんでいるのであろうか。

コンタクトレンズのメーカーACUVUE® ～目目（メメ）知識～より、涙の理由は①基礎分泌、②反射分泌、③情動性分泌とある。聞き手の涙は③の情動性分泌に間違いない。

心理学者のD. ブオノマーノは「恐れ」は自分の感じる驚異のレベルを現実的に妥協なレベルより常に少し高く設定しておくためのものと言っている。とすると、聞き手の「畏れぬ」と感じている人物と、「彼」の恐れの設定値が違うのであろうか。「彼」の必死に涙がでるのはそのような理由であろう。

それにしても、鉱物採取の野外学習で鴻之舞金山上藻別駅通跡を訪れてから、砂金粒でぎっしりの滝壺を見てみたいと思う。この作品を読んで、自分が果たして鉱物としての砂金粒で終わるのかどうかは判らない……。

二度あることは三度あった。大正3年の三王金山（のちの鴻之舞金山）の発見である。

住友に鴻之舞売山後の分配を受けた羽柴義謙は、小石川に仮住まいを構え第一次世界大戦の好景気に乗り会社設立に関与したが、大正8年のパニックですべての財を失うのである。

T8年のパニックに向かう年のT7年の作品であった。

眼力、渦潮望む 読書会案内の課題作品紹介では「～少し戸惑うかもしれません」とありました。なるほど、有島武郎の短編『「死」を恐れぬ男』は、ほどよい語り口調に導かれつつ、時代の潮流に巻き込まれていく社会心理の怖さに気づかされ、眩暈を覚えそうです。

作中の年代は大正4年(1915)以来、とあります。発表は大正7年(1918)3月とのこと。第1次世界大戦に参戦した日本がドイツ領有の青島や太平洋上の島々を占領し、10年前の日露戦争勝利に続けとシベリア出兵するなど、国民に国威発揚の幻影をいだかせていた時代です。戦争成金の一方で農村は疲弊。米価高騰と生活苦にあえぐ民衆は暴動へ、と内外は渦潮状況です。作者は渦中であって渦の外に立ち、時代と人心の揺らぎを見詰めます。

登場人物のキャラクター 米の先物相場を「天職」とうそぶく酒太りに脂ぎった四十男を登場させます。この相場師、耳たぶが貧相。金が儲かるように自分で福相にしたいと、指先で耳たぶをつまむ仕草が癖です。どこか滑稽な外見の創造は、この時代の社会や大衆を形にするとこう見えるということか。写真に残る有島自身の見かけとは真逆の造形です。

この四十男に時代の衣を着せて、山の手に住む人物のお宅を訪ね、語らせます。話を聞かされる作中の「私」は作家である有島か、あるいはこの小説の読み手か、いや、渦潮に目がくらんでいる市井の民か。饒舌に語る四十男に口調に、にやにやしつとも引き込まれてゆきます。散文で表現しながら、落語家か講談師の話芸のように、よどみはありません。

8月「この相場は買いだ、買いだ」と買いまくっているところに、今年は豊作になるとの観測が流れます。米相場は一転底なしの暴落に見舞われて、この四十男丸裸に、と観念。そこへ大嵐の来襲で、豊作予想は外れとなり、今度は大儲けか。前祝いに町中の芸者を集めて乱痴気騒ぎをやったのけーといった調子ですが、こんなセリフも織り込んであります。

「～その先は笑い事ではなくなるんです。日本という国がこの『あぶあぶ』をやっているんですから。神風だっておいそれとは吹いて下さいませんや。おまけに国民心理がばらばらだからたまりません～」

二人称で冴える風刺劇 物語はこの四十男の語りで構成されます。そこには聞き役が存在が居て、男の動作や表情を細かく観察し、話に合いの手を入れて、進行させます。一人称が二人称に入れ替わってゆくように、聞き役があたかも主役のようになる表現の巧みさ。

男は晴れた空に毒づきながら駅のホームで列車の到着を待っているとき、進入してきた機関車への飛び込みに遭遇します。先刻見かけた自分と同じくらいの年恰好の夫婦ものだったか。「レールの中に日和下駄が片方裏返しになって」と語ります。一等車に乗り込むと、車掌からの情報です。飛び込んだのは「大船の在にすむ中百姓」だったとわかりました。

面白うて、やがて悲しき 乗り合わせたのは年増盛りのご新造と十二、三になる娘の二人づれ。男はあれこれ妄想をめぐらせ、列車は相場が立つ東京へ。番狂わせが起きていて大儲けする、とい

う顛末。「百姓が首をくくったって、かまってはられない」とまくしたてる男は、死をも恐れぬ風情。悠々と耳たぶを引っ張ると、指でつまんだ餅菓子の餡が耳につく。

聞き役の私は吹き出そうとするが「**咄嗟に出たものは、笑いではなくて涙だった**」と。(E)

作品名で、「死」と括弧書きになっているのが気になっている。

1. 有島の言葉遊び

有島の作品で言葉遊びをしているものがあつたのを覚えておられるだろうか。前々回の読書会で読んだ『奇跡の咀』がそうだ。その作品の感想文に私がドタバタ調だと書いたのは、作品の底に流れる滑稽さに加えて、次のような言葉遊びを有島が含ませているからだった。終わりから3頁目(p202)のAとBの会話に何と立て続けに3箇所出てくるので引用する。(以下、下線は引用者)

B: 俺れの足だって跋ではみっこないや。

A: 俺れは俺れの片輪を看板にしてやつて来てみたのに、この眼に癒られちゃほんとに百年且だ。

B: 俺れだつてこの足が立っちゃ立つ瀬がなくなる。

言葉遊びをするにはそれなりの作風が必要で、『奇跡の咀』はそういう雰囲気を持った作品にしようと考えたに違いない。

同じことが今回の作品にも当てはまるようだ。全編の9割方は主人公の相場師が私を相手に一人でしゃべっている体裁を採っているが、その中に「変りはないと思召せ。よござんすか。」(p386)「よう御座んすか、さうすると如何でせう。」(p388)を始めとしていかにも語り慣れた香具師の口上を聞いているような、或いは、つい話の流れに引き込まれてしまう筋立てなので講談を聞いているような気持ちになった。そう言えば、蒸し暑い陽気に「団扇を執って忙がしく使ひながら…話の急所に来ると、その団扇は軍扇のやうに振り廻された」とあるから、ますます講談だと思ひねえ(笑)。

さて話を戻して、『奇跡の咀』と同種の言葉遊びを挙げてみる。

p384 ぐわらぐわらと音を立てんばかりの大瓦落です。

p385 ・汗は止度もなくくだくだとその額から流れる。

・それに金はある兵糧はある武器はある、眼の玉と膽っ玉と金玉と三調子揃ってるんだから大したもんだ。

・所が行って見るとね、足腰も立たないやうなひよろひよろなのが兵糧なしで足掻いてるんですからね。

特に p385 には3つも出てくるのは『奇跡の咀』を思わせる。

以上のような言葉遊びとは異なった雰囲気を作っているのが、続々と出てくる俗っぽい表現(決

まり文句) である。これも列挙して、分かる範囲で説明をつけた。当時の言葉遣いが知れて面白い。

- p385 「得たし賢し」…うまくいった、しめたの意。思う通りに事が運んだ時に喜んで発する語
- p388 「すててこを踊っちまいましたよ、全く。」…すててこ踊りとは座敷の騒ぎ踊りのことで、鼻をつまんで捨てる真似をして踊ったところからの命名
- p389 ・「今日様」…その日を守る神。太陽、お天道様のこと
・「大風の後」…大風が吹いた後は極めて静かになることから、騒がしさの後、急に静かになる様を言う
- p392 ・「女にも随徳寺をきめこまれ」…ずいとそのままにする意で、後の事など構わずに跡をくらすことを言う。「恐れ入谷の鬼子母神」の類
・「雨に悩める海棠」…「海棠の雨に濡れたる風情」という表現がある。美人のうちしおれた姿を例えたもの
- p393 ・「持参の髪道具まで曲げ込ませた」…「曲げる」というのは質にいれること。「質」と同音の「七」の第二画の先が曲がっていることから言う
・「間尺にも何んにも合ふもんですか」…間尺に合わないとは割に合わないこと
・「女って奴は方圖（ず）がない」…限りがない、定めがない意
- p394 ・「もう私もセント、ヘレナだと思ひましたよ」…これは分からなかったが、セントヘレナはナポレオン一世の流罪の地であることから、もう駄目だと覚悟する意だろうか。間に入っている読点も気になる
・「英雄の心緒乱れて絲の如し」…「心緒」（しんしょ）は心の中に思っていること。太田道灌の逸話を漢詩にしたその最後の部分。心の中が千々に乱れて、もつれてほどけない糸のようであったの意

《逸話》太田左衛門大夫持資は上杉定正の家臣なり。鷹狩りに出でて雨に遭ひ、ある小屋に入りて「蓑を借らん」といふに、若き女の何ともものをいはずして、山吹の花の一枝を折りて出だしければ、「花を求むるにあらず」とて、怒りて帰りしに、これを聞きし人の、「それは、七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき、といふ古歌の意なるべし」といふ。持資おどろきて、それより歌に心を寄せけり（「常山紀談」）

（奥ゆかしい少女の気持ちを知らずとも自分の無学を恥じた。）

- ・「子供が泣く事を雨が降るつていふでせう」…この表現は知らなかった。シクシク泣いたり、急にわーっと泣き出したりするからだろうか
- ・「メこの兎」…物事がうまくいったということをしゃれて言う言葉
- P395 「鼎の湧くやうな騒ぎ」…「鼎沸（ていふつ）」という言葉がある。かなえの湯が沸き立つように群衆などが騒ぎ立つこと
- P396 ・「彼れは胸中の磊砢（らいかい）を吐き尽したといふやうに」…「磊砢」は高く険しい様だが、同じ読みで「磊塊」となると、心中穏やかでない様とか積み重なった不平の意になり文意に沿う。『奇跡の咀』にあった「咀」と「詛」の関係と同じで有島独特の当

て字かと思う。

2. 隠れた主題……題名の「死」に括弧があるのは何故？

いかにも話し好きの相場師が私の家にふらりと立ち寄って心に抱えたもやもやを、最近の出来事を元に自慢話のふりかけ付きで語って去っていきただけのように見えるが、そうだろうか。引っ掛かっているのは、相場の話が戦争と結び付けてある所。この戦争は第一次世界大戦で、飛行機、戦車、潜水艦が活躍していることは有史以来の出来事だとの新聞情報の後で、ドイツの戦い方が素晴らしいというコメントが付く。ドイツには金も食糧も武器もある上に、日頃から備えを怠らず、戦機を正確に掴む能力がある。それなのに日本はどうだ。肝っ玉の小さく、体格も貧弱な兵隊で、食糧補給も十分ではない。国も一つにまとまっていないうし、金がないから腰が据わっていないと散々な言い様だ。そのあとに取って付けたように、今だって大日本帝国だし、国威は上がっているのに不足はないが、相場師風情だからもう少し上を目指してほしいという気持ちは皆と同じだとわざとらしい言い訳をしている。これは明らかに戦争のやり方を皮肉っているように読める。さすがに戦争は止めるべきだとは言っていないし、言えない風潮もあっただろう。

戦争のつながりで考えてみる。汽車往生で男が亡くなったことと、車両の中にいた母子がそれを知って涙するところがある。その舞台を変えてみれば、戦地で命令を受けて覚悟して死に向かった男と、国に残された母子が死亡通知をもらって泣いている姿と重なるように思えるのではないか。さらに戦争による死傷者の数も夥しいとある。勝利しても死傷者は数え切れない程多いし、負ければその上に行く。やはり戦争はすべきでないと言っているようだ。

ところでこの相場師は、子供の泣き声から雨を連想し、それを相場で勝てることに結び付ける。汽車往生した男から、雨と鉄道往生を結び付ける。どんなことでも相場と結び付けて勝手に元気づいて勝ち馬にのる勢いを示している。この人物を描くことで、根拠のない戦勝を想定して勝手に盛り上がっている日本の姿を表そうとしたのではないかと考えた。「死」を畏れない男というのは、自分は死に直面することがなく安心して兵隊を死に追いやる軍隊の上官や軍部中枢の人間を暗示しており、そういう人間こそが勝ち残って日本を動かしていくのだという皮肉を込めた作品だと感じた。「死」に括弧が付いているのは「自分以外の者の死」を畏れないという意味ではないのか。

以上の私の見立てを援護していると覚しき、戦争、国威、軍人、死などに関するであろう部分を列挙しておこう。

P384 「歐羅巴の毛唐人なんか、腐ったツてくたばったツて蚊の鳴く程にも感じません」

p388 「全くあの暴（あ）れやうぢゃ首をくくつた水呑百姓の一人や二人は出来ましたぜ、可哀さうに。然しまあお陰でこつちは浮上りましたよ」

p393-4 「私はこれでも若い時から志だけは大きく持つてゐました。何んでも骨節を働かして成功し上げて、日本を背負つて立たうといふんです。だからそんぢよそこらの奴等が私の向ふに廻つた所がビクともするんぢゃありませんが、何しろ私一人を差措いた仕打ちは癩でさあ」

p394 「かうなるとあの鐵道自殺もヒステリーの御新造一行も縁なき衆生處か、私の爲めにわざわざ死んだり泣いたりしてくれたやうなもんです。私はすっかり難有くなつちまひましてね」

p395 「死にたいつていふ殊勝な男がゐてくれたばかりにすっかり元氣づいちやつて」

p396 「百姓が首をくくつたつて、物價が騰貴したつてかうなつて来ちや構つてはみられません、脊に腹は代へられませんからね」

3. この作品のネタ元？

文中にロスチャイルドの名前が出てきた。よく分からなかった「セント、ヘレナ」も出てきた。それが繋がっているとしたら面白くなると思ったわけではないが、調べてみたら面白かった。

ネイサン・ロスチャイルドは 18～19 世紀の人で、ドイツ出身の英国の銀行家。1815 年 6 月 18 日にワーテルローの戦いが始まると、英国の公債を持っていたネイサンは英国内や大陸にあった一族の情報網を駆使して英国の勝利を確信した。彼らの情報網は金融界に知れ渡っていたため、誰もがネイサンの動向を注視していたところ、ネイサンは常識とは逆に英国公債を売りに出た（「ネイサンの逆売り」）。それを見て英国の敗戦を確信した投資家たちも一斉に売りに出たため、公債は暴落した。その機を逃さずネイサンは急遽爆買いに走った。英国がナポレオン軍に勝利との報告が入ると公債は急騰、ネイサンは莫大な利益を上げた。一説には、英国公債の 6 割を所有していたネイサンは逆売りをしたため資産が 2500 倍になったとか、18 世紀欧州資産の半分はロスチャイルド家のものであったと言われた。そして、負けたナポレオン一世はセントヘレナ島に流された。

もうお気づきと思うが、日本一強気の大將である越後の新見が暴落した相場を見て売りに回ったが、主人公の相場師は本宅や別荘を抵当に入れて借金して爆買いに走ったとある。のち天気が一転して大荒れになり、米相場は高騰したので大儲けしたという話。売り買いの駆け引きがネイサンの場合と似ている。だから「セント、ヘレナ」が出てくるのか？

案外、このあたりがネタ元だという推理も「当たらずといえども遠からず」ではないか。お後がよろしいようで(笑)。

有島読書ノート 37： もう一つの作風 ～ 『「死」を畏れぬ男』

Ums.

作家は、自身の作品に表題をつける時、さまざまな想いを巡らすはずだ。
たとえば「カインの末裔」「平凡人の手紙」などの表題に託された暗喩の深さは、作者有島武郎の複雑に屈折した狙いを感じさせるのに十分な例であろう。
では、『「死」を畏れぬ男』(T7.3) の場合はどうか。
わかりやすい表題とも言えるが、作風全体との間にある種のギャップを感じさせ、読み始めた段階で一瞬の戸惑いを誘う。この表題も、一筋ならではいかない深層を内包しているようだ。

1 「死」とは？

表題『「死」を畏れぬ男』における鉤括弧付きの「死」は、本文の中で描かれている次の含意を指すものだろう。
全体を通じてその箇所を抽出すると、次のような内容となっている。

「生きていないといへば、今日は生きていたくない人間を見ちまひましてね」(P386)

「知りもしない人間の一匹や半匹死んだのを自分でも死ぬ事のやうに可哀想だ可哀想だって泣いているんですからね。」(P393)

「かうなるとあの鉄道自殺もヒステリーの御新造一行も縁なき衆生処か、私の為にわざわざ死んだり泣いたりしてくれたやうなものです」(P394)

「死にたいっていふ殊勝な男がいてくれたばかりにすっかり元気づいちゃって、・・中略・・」(P395)

「百姓が首をくくったって、物価が騰貴したってかうなって来ちゃ構ってはいられません。背に腹は代へられませんからね」(P396)

「あの「死」をも畏れない勇敢な男はその時戦場に向かってひたすらに駆けさせていたのだ」(P397)

いずれも、鉄道投身自殺した男によって主人公の相場師が受けた影響のなかで、その「死」を相場における投機判断に利用しようとしている状況を表している。この相場師にとって、他者の生死は相場変動の一要因としてしか認識されていない。人間の「死」を、ビジネスゲーム展開における単なる一現象としか捉えていない。

このような主人公の相場師は、特殊な個性の持ち主なのだろうか？

そうではなく、相場つまり金融市場に象徴される資本主義社会に固有な、その限りで普遍的な典型例を仮託したのが、この主人公である。この物語が設定されている時代が1914(T3)年から1918(T7)年まで続いた第1次世界大戦の最中であることを考えると、遠隔地の戦争による特需を追い風にした工業化で経済振興が急激に進展する中、人々の心がどのような変容を受けたのか、その象徴的人

物として相場師である主人公が描かれているのである。離れた戦場の影響で世界の金融市場が急激に変動することによって、他者の死に無頓着になっていく人の心を、主人公に仮託している。では、この主人公は、人の「死」をどのようなものとして受け止めていたのだろうか。

2. 「畏れぬ」ということ

表題における「畏れぬ」とはどういうことか。

「死」を畏れない、という表題は、何を意味するのか。

「畏れる」というのは、圧倒的な存在、例えば神仏や目上の人物などに対して慎み厳肅な態度になることを、字義としては意味している。この表題では、「死」が圧倒的な存在として「畏れる」対象とされている。そして、そのように「畏れるべき対象である「死」を畏れない人物として、主人公の相場師が描かれているのである。

この表題『「死」を畏れぬ男』について、武郎自身がかかなり明確に定義した文章がある。

これは、彼が水野仙子に宛てた書簡の中で書いていることである。

水野仙子は、武郎のこの作品に関心を寄せた同時代における数少ない作家の一人であった。関連する一部だけ引用する。

「今朝時事新報で私の「死をおそれぬ男」(ママ)に対するあなたの御批評を拝見しました。一體なら私は自分の作物を弁解したり説明した入りすることはしないのですが、川浪兄を御知り申して居る関係から同士のような心持ちになって一寸この手紙を書く気になりました。それにあの表題が読者を迷はすと思ったものですからその訂正の意味をもこめて。

あれは当然「死」を畏れぬとせらるべき表題だったのです。或いは「死」の畏れを知らぬ男と申したならさらに適切かもしれません。これだけ申せば現にあなたはお知りになってくださったでせう」

(1918(大正7)年3月6日水野仙子宛)

確かに武郎自身がいうように、「死」の畏れを知らぬ男、とした方が、よりわかりやすかったと思われる。

つまり、「死」は本来「畏れる」べき厳肅なものであって軽んじるべきことではないにもかかわらず、この主人公は「死」が畏れるべきものであることを無視し、「死」をあたかも道具か何かのように自分が制御している風を装っているのである。

武郎自身は、1916(大正5)年に妻を亡くしたことを機に、その「死」が意味するものを深く掘り下げ、「死とその前後」「実験室」「平凡人の手紙」などによって、自身の内面の矛盾を切り刻む作品を書き続けた。学生時代の自殺未遂以降、「死」は彼にとって厳肅にして身近なものであっただろう。その彼は、この作品において「死」をどのように対象化したのだろうか。

3. 主人公の背景となった時代

主人公は、そのアイデンティティにおいてどのような存在なのか。
相場師として、彼は同時代を次のように認識していることが窺える。

「どうもこの二三日のやうな未曾有の乱痴気騒ぎぢや玄人も野線屋もあつたもんぢやありません。
何しろ大正四年以来といふんですからなあ」(P383)

「それでもこの頃のやうな戦争の有様を新聞で見てるてえと驚かすにはいられませんからね。世界
の歴史をどこを探したってありやしませんやこんな事は。素晴らしいもんですよ全く。」(P384)

「何しろロンドンといふ世界の市場で取引が停止されたんだから全く驚かすにはいられませんよ」
(P385)

「神風だって今時は相場が上がっていますから、さうおいそれと吹いては下さいませんや」(P386)

「諸式が上がって米だけ上がらないって法はない。と、ここん所に胸が据わったから、洗いざらい
持ち出して新見のお株をひったくってやりました」(P387)

「輸出の荷が動き過ぎるので米の回送がとまるか、豪雨で線路が破壊して米が動かなくなるか、兎
に角鉄道が往生するんです。」(P394)

相場師をアイデンティティとする主人公は、上記のような時代認識によってそのアイデンティティ
を支えている。ここにみられるのは、相場というビジネス上の冒険が彼の人生そのものであり、富
の獲得というよりビジネスチャレンジの冒険こそが生きがいとなっている人物である。その冒険の
延長に成功と失敗があり、その一方の結末として自らの死も意識しているが、それはある種ゲーム
上の象徴的な死であり、そのような資本主義経済社会全体によって余儀なくされた多くの人々の尊
厳としての「死」ではない。彼が認識している死は、その「死」のおよそ対極にある、カリカチュ
アライズされ冷笑された死である。

彼は、自らだけでなく他者の人生の明暗をも左右し弄ぶ結果となる金融資本ゲームの醍醐味に生き
ている存在である。しかも、その金融資本のゲームは、平時ではなく戦時における異常なダイナミ
ズムを背景とし、その中でゲームに陶醉しているのである。いわば、戦争特需に基づく金融資本に
より動かされた相場によって冒流された、人間本来の尊厳としての「死」を弄ぶ、戯画的に偽装さ
れたもうひとつの死を描いている作品である。

しかも、この戦争特需は、日本から遠く離れた欧州を主戦場とする第一次世界大戦（1914(大正3)
～1918(大正7)年）によるものであり、戦禍に累々と晒された「死」が可視化されず、経済的利益
の幻影のみが日本全土を覆い、多くの国民の眼も心も本来の識別判断能力を失い、「死」そのもの
に対して極めて鈍感になっている日本社会が、主人公の出自であり、彼のアイデンティティの背景
である。言い換えれば、生きることと死ぬこととのかけがいのなさを知らない日本社会の象徴として、
主人公の相場師が描かれているのである。

4. 主人公の水脈

ここでもう一度、水野仙子宛武郎の書簡を参照する。

「即ち人間の生活に正しい関係を造る事が出来ないで見当違いな生き方で自分をごまかして責めて得意を感じようとしている憫れむべき男を書いて見たのです。私が一番嫌いな男の典型を丸彫りにして見たいと思ったのです。うんと皮肉をあびせてやりたかったのです。然し仕舞いまで来ると何ともいへずその男が憫れまれて来ました。正しい生活から全く切り放されたその人に悪罵を浴せかけることが非常に悔まれて来ました。私は結末の処を書きながら不思議をおとしてしまったのです。でもあなたが抜粋なさったあの文句を後から挿入したのです」(1918(大正7)年3月6日水野仙子宛)

この引用によって、もはやこの作品を読解する苦しみも楽しみも奪われてしまうようなものだが、水野仙子に対する武郎の好意に敬意を表して、武郎の書簡に素直に耳を傾けたい。

この書簡の末尾に示唆された、武郎が挿入した箇所というのは、次のところであろう。水野仙子もこの箇所に関心を払い、おそらくこの作品の真髄として評価したのではないだろうか。

「私はそれを見ると思わず吹き出そうとしたが、咄嗟に出たものは、笑ではなくて涙だった。今でもその時の心持が自分ながら分からない。私は始めて開放されたやうにほっと溜息をして部屋に戻った」(P396)

「死」の畏れに鈍感になっている主人公一人を責めているのでもなく、その背景となった戦争特需に湧く金融資本主義社会を批判することを目的としているのでもなく、武郎は主人公を、戦争を背景とした経済活動の異常さによって操られ、その愚かさと悲哀が一体となった人間の本质において見つめている。

このような視線は、武郎の作品の中で決して主流を占めるほど多くはない。しかし、たとえば『かかん虫』(M43)や『お末の死』(T3)のように、社会の矛盾に視線を注ぎながらもその構造自体を直接批判的に描くのではなく、その中で生きそして死んでいく人間を描き分けようとした作品がある。彼の思想的水脈からすると、このような作品がもっと多く書かれて然るべきはずだと思われるが、どこかの時点で、そうではない表現手法に突き進んだのであろう。自然主義的表現に傾いていくことを避け、表現主義的な道を模索したターニングポイントは、おそらく『或る女のグリンプス』(T2)執筆時の政治状況を背景にそれ以降のことだったのではないかと私は思っている。

そのような武郎の表現手法の変遷経過を顧みると、『「死」を恐れぬ男』は武郎の原点ともいえるべき水源地から流れ出した稀有な作品であると言える。それは、奇跡の三年と言われた多作の時期だったからこそ書けた彼自身のもうひとつの作風、源流に遡ることのできる作風だったのかもしれない。集中して書けた多作の渦中だからこそチャレンジできた彼自身の根源的な作風、とも言える。彼自身がそのことを意識していたかどうかは、わからないが。

作風の変容は、余裕の中からではなく、追い詰められた切迫の中からこそ生まれるものなのだろう。それは、微かにではあるが、私にもわかるような気がする。

「死を畏れぬ男」(1918年)を読んで

Tan.

「いやー、良かった。さくら、おいちゃんにおぼちゃん。タコ社長もみんな無事で。ようやく東京に着いて本当に腰を抜かしたよ。一面焼け野原で、まるで戦争じゃないか。」

「今までどこをふらついてたってかい？よく聞いてくれた。なにせ本などめったに読まない私が偶然手にした本の作家さんが北の新開地で大きなことをしたって聞いて、この目で見たくて行ってみた。いや、大変な熱気でね。なにせこの本の作者でインテリ地主が小作に農地をタダでくれてやって、みんなで力を合わせ農場を賄ってくれてんだから。そればかりじゃねー。銀行から借金までして、灌漑溝の工事をしたらしい。何でもこの世の空気、土地や水はおのれのもんじゃないって人間みんなのものだって言ってるらしい。まあ、頭の悪いおいらが考えてもそら、どうりだと納得しちゃうけど、てーしたもんだよ。」

「いやー、おいらもうすうすうは感じてたよ。この世がどーにも生きづらい。どっか狂っているってね。遠くで戦争がドンパチおっぱじまるてーと、目端の利く小金持ちは小さな運送船一艘から始めて大船会社に仕立てたり、鉱山に大金つぎ込んで鉄や石炭で大もうけ、コメが不作とみると百姓が首つってるのを横目に、買い占めに走り、とんでもなく儲けた輩もいるって言うじゃないか。人が苦しんで死を選んでも何の恐れも感じない手合いがのさばるなんざ、涙が出るじゃねーか。」

「かのインテリ地主さんは、昨今のご時世を嘆いてちょっと風変わりな書きっぷりの小説を世に問うた。滅多なことでは本屋によることのないおいらは、パラパラめくって面白そうな落語と思ってその本を買ってしまったよ。ある相場師がペラペラと独逸はすごいが日本はだらしがないの、下がる一方の相場の中で大博打を打った顛末を講釈したあげく、そいつが目撃したという汽車往生までもが吉兆とばかり勇み立って蠣殻町の米相場を確認に行っただって話だ。自分の儲けのためなら日本中の稲穂が嵐で擦切れようがおかまいなしに自慢話だ。こんなおそろしい世相に釘を刺そうとしたんだろうね。話の中に今を時めく占い名人高島嘉右衛門さんまで登場させて、政治家迄もがこの御仁に丸め込まれていることがよほど腹に据えかねていたんだろう。おいらでも分かる話を実話も取りこんで書いてくれたってことだろうな。」

「えーっ、なんだって？そいつは驚きだ。3か月前にそのインテリ作家が心中しちゃったってかい？なんてこった。この大地震で世の中不安で、デマに乗せられ多くの朝鮮人や主義者が殺されたって話だ。労働者諸君やお百姓たちがお上にモノ申そうっていう大事な時に。」

「ご本人にはそれなりの事情があったんだろうが、解せないね。第3階級がどうのだから、愛は奪うものとか小難しいことはいいから、生き抜いて助けを求めているものには手を貸すのが愛じゃないのかい。「相互扶助」はどこへ行ったって言いたいね。立派な言葉を残しても自分で大事な命を絶ってしまうなんざ分からねー。大河小説の続編を待つ多くの読者がいたそうじゃないか。もったいないことしたねー。」

「何？タコ社長。インテリは当てになんねーって？それを言っちゃ、おしめーよっ。」

1 初めに

主人公の「彼」は『カインの末裔』の広岡仁右衛門のソックリさんだというのが一読後の感想だった。例えば仁右衛門は吹雪の雪原に消えていくが、「彼」は戦場に向って驀直に車を駈けさせる。緩急の違いなどはあるが、余韻を含んで読者の視界から消えていく点は同じだろう。芥川の『羅生門』の終わりは下人が夜の闇の中へ走りこんで「行方は誰も知らない」だから、小説家ならだれもが使う常套的手法なのかもしれない。とは思うものの、なぜ我ながら疑心を持たないでもない妙な感想を持ったのかを考えてみたい。

小説の最後の部分で「私」が「彼」について語る部分を引用する。

なお、「彼」「私」は「」を外して表記し、いつものように引用は新仮名遣いに変える。

そういつて彼はせかせかと座を立った。玄関で挨拶をする時に見ると、彼が指で摘んで食べた餅菓子の餡がその大事な耳たぶに少しばかり食付いていた。私はそれを見ると思わず吹出そうとしたが、咄嗟に出たものは、笑いではなく涙だった。今でもその時の心持ちが自分ながら分らない。私は始めて開放されたようにほっと溜息をして部屋に帰った。雨はぽつりぽつりと八つ手の葉に音を立てて降り増さつて来た。涼しい風がそっと吹き始めた。

プープーという景気のいい自動車の喇叭の音が五六町もある道の曲がり角の辺りから聞こえて来た。あの「死」を畏れない勇敢な男はその時戦場に向って驀直に駈けさせていたのだ。(全集 396～397 頁)

この小説で考えるべき問題のほとんどがこの部分にあるように見える。

第一に、いったい彼のどこが「死」を畏れないと言えるのか。第二に、彼が耳朶に餡を付けたまま辞去するのを見送る私は吹き出しそうになりながら、実は笑いではなく涙を流すのはなぜか。第三に、涙の後で「私は始めて開放されたようにほっと溜息」をつくののだが、溜息はどこからやってくるのか。

2 小説の語り

この小説では主役である彼のテンポのいい独特の語りが特徴的だ。登場するのは私と彼の二人だが、彼の話に私が応答し、私に彼が応答するという会話が一切ない。一方的に彼が語り続け私が聞き続ける。私は彼が汗を拭いた、麦水を飲んだ、餅菓子を食べた、耳朶を引っ張ったなど外から観察できる様子(耳朶を引っ張る描写は7回も出てくる)を2行か3行で紹介するだけで、彼の内面については一切触れない。それに、彼と私はどんな間柄なのかについても一切触れていない。私は聞き役に徹している。

かぎ括弧「」の使い方が妙だ。「」で括られた彼の語りの後に、私が彼の様子などについて触れる個所が続くが、その場合は全く「」が使われず地の文の扱いである。この「」と地の文の個所が合計八か所ある。その他は話頭を示す「だけが付されて、括弧閉じるの」がない。目的はそこが彼の語りの部分だと強調するためだろうが、このような使い方は見たことがない。

いささか些末にわたるが数字で示してみる。全文は 264 行からなり、そのうち彼が語る部分が 238 行、私が彼について触れる部分が 26 行で、比率は実に 9 対 1 である。私は私について語らない。彼の語りの 238 行の内訳は、「」で括られた語りが 8 か所で 44 行あり、話頭の「だけの語り」が 27 か所 194 行ある。ここが話の本題が展開される熱のこもった部分だ。彼の独演会を聞きに来たようにも感じる。なお、私は最後の部分でだけ他の個所よりは長く 7 行の締めくくりをしており、それが冒頭に引用した個所である。

8 月 14 日の午後、彼は私を訪れ饒舌にしゃべり続ける。彼は彼の眼に見えるものを彼の価値観に即して彼が語りたいと思うように彼が満足するまで語り続ける。だから彼の語りにはこれこそ彼自身だと自ら認め得る姿がすっかり出てくるだろう。有島は彼のために独演の機会を用意したが、彼の恣な語りが有島の思い描いたことをなぞる格好になる。それは有島が施した趣向だと思われる。

彼の感情や意思や思想など彼の内面にかかわる事柄は彼の語りを通して読者に伝えられるとともに、皮肉なことだが語り口の制約を受けて彼の深い内面にまでは届きにくくなる。語りの制約と言う意味は、彼の独演の形式では、彼でない人物が彼の語りの内容について疑問や反論を提起することが出来ず、聞き手の立場で説明を求めることもできないということである。彼の語りたいことは自己完結的に既に彼の中に存在しているので、一本調子で進行する。だから語りの内容に綻びがあっても小説の中では修正が効かない制限を負っている。読み手は字面通りの人物を読み取るしかなく、その意味ではかなり窮屈な小説になっている。

3 彼の人間像

彼が私に米相場で儲けた顛末を語るのが話の本通りである。しかし、彼は自ら認めるように話し好きで次々に新しい話題に逸れていき、また本題に戻ってくる。これは彼の性分なのだが、単調になりがちな自慢話を読者に飽きさせない効果も上げ、儲け話以外の話もふんだんに出てくることから人物像が膨らんでいく効果も持つ。しかし、今は語りの流れに追随せず彼の三つの側面に注目し、それぞれについて彼がどのように彼自身を語っているか確かめていきたい。語り口の目くらましに騙されなければ意外に単純なことしか語っていない。

(1) 米相場師の度胸

彼は米相場師で、ひとかどの相場師だという自負を持っている。これまでも相当儲けて来たが、今回も本宅や別荘を抵当に入れて金を作り、いつもの運用資金も併せて大勝負に出ている。聞き手が相場に素人なのにも頓着せず取引用語を平気で用いて儲けのいきさつを面白おかしく語る。最近の半月間の値動きを語るのだが、話に通底する彼の姿勢や判断基準や縁起担ぎなどを整理すると次のようになる。

当年産米は不作であり需給が逼迫すると踏んで、高値でも「今は買いだ」と買いに回る。世界情

勢を見れば諸物価高騰の折、米価だけが値下がりするはずがないとも見ている。大方の相場師は豊作で需給は緩むと見ているのと反対である。

馴染の相場師「深川の山さ」の「買え」という助言をもとに動き始めるが、値動きを左右する大きな要因は天候である。晴は豊作に、雨風は不作に連動する。経験的な観天望気の他、当然気象台の予報も参考にする。涙や裏返った下駄は雨の意味で、列車事故による遅れは後々の値上がりを意味するなど縁起担ぎも行う。列車への飛び込み自殺まで都合よく解釈してしまう。彼が私の家を訪ねるのは8月14日だが相場は山を越えており、彼は大儲けをした自慢話に来たところだ。この日、蛸殻町は大騒ぎだった。彼の読み通り値下がりし收拾もつかない状況で彼だけが儲けた格好で、女にダイヤの5つや6つは奢ってやれる位は実入りがあったと語る。度胸の勝負師というところだ。

まとめると、彼は金儲けに極めて貪欲であり、投機に用いる資金を準備できるだけの信用もある。天候と価格の関係も的確に把握できるだけでなく、世界情勢と相場の動きにもぬかりなく目を届かせている。さらに、相場師たちの一挙手一投足が市場を攪乱しても自らの判断を信じて賭けに出るだけの度胸もある。失敗の不安もないわけではないが勝負師としてそれを楽しみつつ強気を崩さず、自分に都合のいいように出来事を解釈する。金もうけの帰趨に集中するので他人の不幸には一切頓着しない冷たさ無関心さがある

※ なお、取引は一石単位だったらしく、Wikipediaの資料「名古屋米国取引相場一覧表」によれば1917年の最低価格が14円70銭だったとあるから、有島はこの年の相場を参照して数字を作ったものと思われる。

(2) 相場師も大日本帝国の臣民

彼は戦争で諸物価高騰の折、米価だけ下がることはあり得ないと、戦争と米相場とを関係づける話をする。彼の戦争に関する見方はなかなかの見識を示している。

20世紀が始まったばかりなのに希望が持てる世の中ではないと欧州戦争の話から世界の動きに取り残されている日本の政治にまで話が及ぶ。欧州の戦争は新しい武器があり、戦域が広く、戦死者もおびただしい。ロンドンの市場取引停止は世界相場の先行き不明を示している。戦争を始めたドイツは準備周到な強国で条件が揃っている。日本もドイツを見習うべきだ。日本は貧乏所帯で、金はないし国民心理はばらばらだからこのままでは先細りだ。ユダヤ資本や石油資本のような大資本が日本の政治を仕切れば世界が驚き天皇も臣民も尊敬されるだろう。名前だけは大日本帝国でそれなりに一等国だが、もっと強くなりたいと思うのは米相場師風情も人後に落ちないと彼は言う。

一介の相場師とは思えないような情勢分析をしているが、あくまでも相場師の眼から見て、儲けにつながるかどうかの関心に引かれて情勢を語っているのであり、戦死者を悼むとか他者の心情に思いを馳せるなどという思いやりを見せることはない。大船で飛び込み自殺をした中年男についても妻子を捨てるなら覚悟を持って行動すべきだ、若い女に捨てられて悲観のあまりの自殺など問題外だとにべもない。儲かるか否かの観点と帝国臣民として誇りを持ちたいという願望とは時代の中産階級の共通の考え方として有島が抽出したものだと見ていい。

(3) 女は金で片付く

1911年の作品『或る女のグリンプス』は女性が人格としての独立を求めて苦闘する物語だと言われる。確かに新しい生き方を求める女性たちの「青鞥」のグループが活躍していた。

しかし、『或る女のグリンプス』から7年が過ぎても現実の日本の家長制度の在り方に変化はないから、『死』を畏れぬ男の彼が女性を人格を持つ個人としてみる目を持たないのは当然である。女性たちが、彼を前にしてどのような感情を持つか思いをいたすこともない。彼の必要や思い込みの側から見、語れば十分なのである。最後は金で片づくものという見方だ。

妻の場合なら二の膳付きの食事を毎日与えて不自由のない暮らしをさせている。妻は亭主を神棚に飾って感謝を捧げてもいいほどだと嘯く。「女なんぞは線香をたてピカッと来るたんびに震えあがっているから・・・稲光の数だけ天賞堂で粒選りのダイヤを張り込んでやる。」(388頁) 鎌倉に囲っている女について彼が話す内容である。列車の一等室で出会う御新造さんについては、器量のいい女なので、「旦那にあんまり可愛がられないんじゃないかと思ったり、いや、あのきりょうじゃそんな筈ない。どうだい譲ろうかといわれたら二つ返事で何所からでも手が出そうな玉だ」と(393頁1行目)「変妙もないこと」つまり女が自分のものになる可能性を考えたと語る。これらに彼の女性観が表現されている。

(4) 紋切り型の人間

先にも触れたが、彼は結局有島の米相場師像をなぞるだけで独り歩きして精彩を放つことがない。おそらく、有島自身が出来合いのイメージに寄りかかって紋切り型になった。だから同じイメージを共有する読者が予想できる範囲で語りが進行する。この時代、米相場に限らず船成金などたくさんの成金が簇出し、それを当時のジャーナリズムが面白おかしく書き立てたらしいが、彼の語りの面白さはジャーナリズムが書く面白さに近似していて、紋切り型の相場師が紋切り型の話を語り立てていると見える。有島は執筆中に困った状態に陥ったと思わなかっただろうか。『動かぬ時計』のR教授は没落の恐怖に怯えていた。その気持ちは惻惻として伝わってきたが、彼の語りから大儲けをした歓びの爆発は伝わってこない。

4 「一人ぼっち」が示唆する闇

(1) 一人差措かれる感覚

彼の語りの中で一か所紋切り型だという見方に外れる個所がある。有島がこんなことも語りの中に含めていたかと不思議なことにも感じられる。

嬢ちゃんの方が可哀そうだと可哀そうだと頭を震わして泣くのをみると、私の例の上澄みが妙に揺れだしたんです。なんだか私は一人ぼっちでこっちに一人、世間の奴等は組を作って彼方に一かたまり、私にゃ解らない事を喜んだり嘆いたりしているように思えるもんですからね。知りもしない人間の一匹や半匹死んだのを自分でも死ぬ事のように可哀相だと可哀相だって泣いてるんですからね。あの手合いは皆んな私にだけ知らさないで申し合わせをしているなどしか思われません。(393頁)

娘が泣くのを見て、彼はいつもと違う感情に捉えられる。しかし、娘に共感して哀れという心情を共有しているのではない。自殺男のことを素通りして、彼自身と他人との関係の方に語りの焦点が移る。彼は自分は一人ぼっちで、娘を含む奴等は組んでいると感じ、自分と奴等の分岐点は赤の他人の死を哀れがるか否か、そのために泣くか否かという点にあると感じる。奴等は「私にゃ解らないことを喜んだり嘆いたりしている」と奴等との間に在る違和感を率直に認め、「皆んな私にだけ知らさないで(私を一人ぼっちにさせる)申し合わせをしている」と言う。このことは単に感じ方の違いという問題ではなく、「私一人を差措いた仕打ちは癩でさあ」(394 頁)と語ることから一種の被害妄想と見たほうがよい。仲間外れ感、疎外感、離人感とも言える。取引所仲間から売りか買いかで対立して笑い草にされても平然としていられる、「腹の底が据わった」彼の彼らしくない一面である。ところがこの後すぐ、この一人ぼっち感は一時的な気の迷いだったとして、「人間一人ぼっちだなんて怪我にもひがみは起こすもんじゃありませんよ」(395 頁)と納得して笑い飛ばして済ませている。娘の涙は雨が降る意味で吉兆であり取引に有利に働くという解釈ができたからである。

腹の底は安定して自分らしさを堅持しており、上澄みでは時に気の迷いが生じる両面性があるのが自分なのだと自らを説得している。上澄みが揺れだしてもその気分はすぐに元の気分に戻るのであるが、この気分に入れ替わりは見逃せない。相反するもののいずれを選ぶべきか迷う葛藤という心の在り方とは別様のものだからである。しかし、彼にしては珍しいこの入れ替わりを深追いしない。彼が上っ調子でおしゃべりで話題が次々変わるからではなかろう。ここは重要なポイントである。なぜなら独演会の形式を採る語りの構造が邪魔をするので深追いできないからである。一瞬でも一人差措かれる感覚を味わうということは、人間関係の深い部分に他者に対する齟齬があることを示すが、彼もまたいつもは意識しない見知らぬ自分自身の姿を覗き見てしまったことでもある。おとなしく紋切り型の米相場師像に納まらないで一瞬だけ隠れていた弱点(闇)を露呈させている。

(2) 人間関係の弱さは国際関係の拙さ

これまでの議論と少し変わるが、彼が一人ぼっちだと感じるということについて別の解釈を提示してみたい。それは彼を大日本帝国の臣民とみる見方を拡大して、彼をこの時代の平均的な日本人男性、少なくとも世論形成に影響力を持つ人々の代表と見ることである。もっと強い国であってほしいという気持ち(愛国心)は米相場師も持っているのだと彼は語っていた。更に拡大して大日本帝国の姿そのものだと見てもよい。

一人ぼっちだという感覚は国際関係での孤立感を語るものだと見るのである。国際関係と言ってもこの時代は欧米を中心とする国々であるが、それらの国々から冷ややかに見られる傾向は少しずつ大きくなっていった。日露戦争後の黄禍論は収まっていないし、アメリカへの移民も厄介視され始めていたし、大隈内閣の対支 21 か条要求に表向きクレームはつけられていないが戦争のどさくさ紛れに強欲なやり方だという批判はくすぶっていたし、ロシア革命が起こってイギリスの対ロシア緊張が緩むと日英同盟の必要性がイギリス側で薄らいでいた。1922 年には実際に同盟関係が解消する。

仲間外れ意識を帝国主義諸国から疎外され始めている状況として捉え返して見たが、第一次大戦はまだ終結しておらず連合国側の参戦国として待遇されているので、維新以来の強気の外交を想起

し「一人ぼっちだなんて怪我にもひがみは起こすもんじゃありませんよ」と不安を払拭するように思い直した。しかし、彼の話を書く私はじわじわと諸外国に干されていく中で国家の活路を求める帝国の苦しい姿を「死」を恐れぬ男が戦争に驀直する姿として捉えた。この場合、私と有島はほとんどかぶっているが、日本の行く末の悲劇性への予感から私は涙を流すのである。

この解釈はそれなりに筋が通っているはずだ。しかし、有島は時評を小説の形で表現するだけの作家ではないと思うので、これがこの小説の主題だったとは考えたくない。むしろ、政府の長期的展望を欠き且つ独善的な政策を個々人が自己の利益と相反する点を持ちながらも、支えていく臣民一人一人の心の在り方に疑問を呈するところに主眼がある、帝国の為政者に思いのままに操られていていいのかという叱咤だという風に読むほうが納得しやすい。しかし、この読み方は小説の細部の読みとの辻褃合わせが難しい。

(3) 自己完結の破れ目の役割

ところで、彼の語りは自己完結的に仕組まれていた。しかし、このまま終わってしまうなら紋切り型男の単なる金もうけ駄法螺話にしかならない。何らかの方法でそうならないような終結を考えなければならない。その方策として彼自身の口から一つだけ奇妙なことに言及させて破れ目を作り緊張を持ち込んだ。それが仲間外れ感・疎外感だった。いつもは強者の側にいるのに実は弱者の側に交代することもあるのだと気付かせる。ただし、破れ目を掘り下げる語りの部分を作れないという壁がある。もし彼が破れ目に踏みとどまって反省など始めたら、反省を要する個所が次々出てきて收拾がつかなくなる。彼の語りという形式そのものが崩壊するのである。そして、彼の語りの独演振りから仲間外れ感を敷衍する表現は見つけにくい。つまり小説の世界の内側からこれらの点を説明する筋道を見つけれない。あからさまに言えば有島は彼の語りで一篇を構成することに失敗しているのだが、その修正もこの方法の中ではできないのも確かだ。そのために緊急避難的な方法を取らざるを得なくなった。それが冒頭に引用した7行である。

こうして小説の最後に至って私が感想の形で彼の語りに三つの問題を提起する。この時、私は作者の位置に自身を変換して作者に代わって彼を評価するのである。評価は同時に破れ目を修復する方向の示唆でもある。しかし、読者の前には方向が提示されただけで答えらしきものは示されない。この形式を順守する限りこれ以上は踏み込めない、あとは読者に任せるしかない。破れかぶれ捨て身の終わり方だが任された読者には帝国の悲観的未來說よりはかえって喜ばしいかもしれない。

5 涙の理由

(1) 尋常でない何か

「私はそれを見ると思わず吹出そうとしたが、咄嗟に出たものは、笑いではなく涙だった。」既に引用した小説末尾7行の一部である。笑い出すはずが涙が流れたという。しかも咄嗟に気分が変化した。滑稽だと思った次の瞬間に何か尋常でないものが潜んでいることに気が付き、それが何か閃めいたために笑いが消えて涙が流れたのだ。何に気づいたのか直接語る記述はない。しかし、破れ目の修復が狙いだとすると「死」に関わることだと考えるしかない。私が気づく「死」は実際の

生命の死、比喩的な意味で感情の死あるいは彼を支えている生きる意味そのものの死など考えられる。私は彼を死に向かって驀進していくと評しているが、当の彼はそのことを知っていてあえて進むのか、知らずに不可避的に向かうのか、わからない。いずれにしても私は彼の未来に待ち受ける死を思いやって涙することには変わりがない。

例えば、彼が車を駈けさせるのは蛸殻町の取引所で、そこは血みどろの激しい戦いの行われる修羅場である。成金となるか乞食になるか一瞬の出来事である。米相場師であること自体が死と隣り合わせである。彼はそういう危険を畏れない男だと私は思った。悠然とあるいは喜々として蛸殻町に帰る彼を死を畏れない蛮勇の持ち主だと言った。こんな風に解釈することもできるが、この程度のことでは笑いが引っ込んで涙を流すか怪しい。

(2) 変わり身の早さ

一人ぼっち感との関連で考えてみる。これは疎外感であり離人感でもあった。彼はそれを訴えた後、都合の良い解釈を見つけ出して、「一人ぼっちだなどと怪我にもひがみを持ってはいけない」と自分に言い聞かせて、そう感じた自分自身を笑い飛ばした。しかし、一人ぼっちをひがみと自らを言いくるめる変わり身の早さに誤魔化しがあるのではないかと。涙の理由を解き、「死を恐れぬ男」と称える鍵が隠れているのではないかと。

腹の底は座っている、上澄みが揺れるという比喩的な言い方を底＝性格・習性、上澄み＝情念・感情と置き換えると少し見えてくることがある。彼の内面の深いところに人間関係において齟齬を感じる心が働いていて、普段は性格・習性に従って覆い隠しているのに、時々ふと情念・感情が表に出てくる。例えば米取引での人間関係の対立は平然としていられるのだが、娘の涙が人間関係の対立を浮き上がらせると自らの危さを感じて不安定になる。しかし、性格がまさって自らを勝者と確認し、ご都合主義的な解釈をして不安を覆い隠す。人間関係の齟齬感が一人ぼっち感の根っこにわだかまっている。このわだかまるものが彼自身を追い詰めていくだろうと解釈してみる。すると、私は彼についてこういう判断を下すことが出来る。今は得意の絶頂にあるが、いずれ失意のどん底にあえぐ時が来る。それは「死」に値することだと彼は気づいていないが、それに向かって驀進していくのだと。彼の抱える闇に気づくことで闇とともに生きる彼の未来に涙を流し、私は彼を何ほどこか理解しえたという開放感に浸ることが出来る。

(3) 腹の底と上澄みの入れ替わり

涙の理由は読者任せになっていると指摘した手前、一人の読者としてどのような理由に思い至るか書いてみたい。一人ぼっち感とは彼の語りの中では異質な内容だと有島自身も知っていて眩かせたのだが、おそらく有島が意図した以上のことまで語ってしまったのではないかと、これが思い至ることである。

娘の泣き顔を見ていて感情が動かされた彼は、娘や自殺者に同情する気持ちは全然ないが、周りが同情するような様子なので自分一人が仲間外れにされている気分になる。そしてすぐに娘の涙は吉兆だと思いつくと、一人ぼっちだなどとひがんではいけないと自らをたしなめる。上澄みに囚われていたのがいつもの腹の底に戻るのだから。ほとんど瞬間的に入れ替わる。底と上澄みが葛藤し対立抗争するのではないところが注目点だ。

気分が入れ替わるところに注目して彼の語りを眺めなおすと、関連することがいくつも出てくる。例えば自慢話がしたくて私のところにやってきたこと、妻にしろ妾にしろ自分の思いのままに扱えるものだと思っていること、おしゃべり好きなこと、他人の感情に対する共感性が乏しいこと等々、こうした彼の語り内容を合わせてみると、この小説に描かれた彼を単なる紋切り型の人物という類型で見るだけでなく、循環気質の人格を持った人物像だということも併せて考えるべきではないか。端的に言って、躁と鬱の要素が彼の中にあるとして、ほとんど躁状態の彼が描かれている中で、仲間外れ感を語る部分に特徴的に鬱の姿が表れている。例示した個所も循環気質の人格像としてよく知られた性格特徴を示している。彼の口を借りて作者有島の心的な状態まで表現してしまった、語りの制約のもたらす思わぬ結果であるように見える。これは有島に即してみれば有島の無意識の裡に進行することなのだろうから、小説上の彼に語らせるべき事柄としてその内容をあらかじめ準備するなどということはできない。結果論だが読者の付度に任せざるを得ない領域だった。

感情に揺らぐ姿を覆い隠して賑やかな面だけを見せようと無意識の裡に自らに強いている彼の姿を見て、私は相場の勝ち組だけでは済まされない彼の闇の存在に気付く。その行く末には彼にとっての世界の意味の激変が待っている。そのことを思えば思わず落涙もするのである。不可避的な精神の死への驀進とも見える。

私は彼を見送る際に涙した理由がわからないと言っていた点だが、どのように解釈するにしろ、理由を私がこの場所で語るのとは小説として避けるべきであろう。語るに落ちるからである。

※ 彼は都会の仁右衛門ではないかと初発の感想を記した。そのことを考えようとしたのだがここまで書いて力尽きてしまった。彼が隠し持つ人間関係に対する齟齬感が仁右衛門の無口な性格と通底するという直感は今も変わらないのだが、単なる思い込みでないと説明するためには二人を対照して検討すべきことが山ほどある。羊頭狗肉という結果になって残念だが、今回は未解決のままでご勘弁願いたい。

この小説の形式上の特徴は「彼」の一人語りにある。

登場人物間で対話がない形式であることから、有利な点と不利な点が生じる。勿論作者は承知の上でこの形式を選んだ。有利な点は、彼が自分の胸の内に湧き上がる語りたいことをだれにも邪魔されずに、語りたように語りただけ語ることが出来る点にある。不利な点は、語りに何か言い忘れや不足があったり、聞き手に疑問点があつて問い返したくても話し手がそれを聞いて答える機会を作れないことである。作者が予め彼に小説の主役として必要十分な話すべき内容と語り口を準備し、彼に作者の傀儡としての役割を忠実に演じさせることが出来る半面、与えられた役割以上に自ら作中で勝手に行動し始める自由が与えられていないということでもある。この形式を選ぶのは作者だがこの形式に作者も縛られるのである。

舞台は 1917 年の 8 月に設定されており、作者も登場人物もまだ知らないが、翌年の 8 月には富山の漁村に発った米騒動が全国に広がっていく。つまり米相場が高騰する直前の状況下で小説が始まる。中堅どころの米相場師であろう彼は私を相手に米相場で大儲けをした顛末を得意げに語る。この年の夏、Wikipedia で調べると米価は一石平均 15 円前後で推移しており最高 23 円まで値上がりする。もし彼が底値の 14 円で買い、高値の 23 円で売り抜けたとすれば、一石あたり 9 円の儲けである。小学校教員の月給が 60 円前後の時代、この儲け幅はバカにならない。彼の投下資本は数千円にのぼると見られるからである。彼の得意のほどが思われ、自慢したくなる気持ちも宜なるかなというべきだろう。

さて彼の儲け話の内容を三つに絞ってまとめるとこうなる。

第一に彼の相場観は周到である。本年度産米は天候の状態から不作だという見通しを持っており、欧州の戦争で物資の需給関係がひっ迫し、国内が好景気に沸いていることを合わせてみれば、米価が値下りする要素はなく必ず上昇すると読んでいる。そのため現下においては多少高い相場でも買いに回る姿勢を一貫している。高揚感を味わいながら勝負を挑む勝負師である。店員や他の相場師たちが日々の値動きに右往左往するのと大違いである。第二に欧州の戦争が新しい時代をもたらすという予感を持っていること。ドイツは当時の日本の立場から見れば敵国であるが、日本も見習うべき点が多いと指摘している。日本は貧乏所帯で国民心理はばらばらなので、もっと大資本が政治を主導する必要がある。そうしてこそ天皇も臣民も国際社会から尊敬される。米相場師とは言え臣民の一人として強大な大日本帝国の一員でありたいと願望を語る。第三に、妻にはいい思いをさせてやっているから妾を困っても不満はないはずだし、その妾も可愛がっているので思い通りに仕えてくれる。すこぶる女好きである。これらは順不同にあの話題この話題と行きつ戻りつしながら語られる。そこが語りの特徴でもある。彼は紋切り型の成り上がった相場師像として描かれる。有島は出来合いの成金像に合わせて造形したと思われる。しかし、一か所だけこの人間像から外れて「一

人ぼっち」の不安を語る場面がある。ただ、それもまた彼に好都合な解釈を発見させて、不安に陥ったこと自体を自分で否定させている。

こうして彼の駄法螺話は終わるのだが、聞き終わった私は、帰っていく彼を見て彼についての感想を語る。ポイントは、一、滑稽で笑いたかったのに実際は涙を流したこと。二、彼が視界から消えた後、私は「開放感からほっと溜息をつく」こと。三、彼が乗った自動車は戦場に向かったと言い、彼を「死」を恐れぬ男だということ。私のこの感想は読者の立場からみて理解しにくい。

いくつかの解釈を並べてみたい。

1 彼は当時の日本人の典型として描かれており、さらに拡大すれば大日本帝国の似姿でもある。戦時下の好景気を好機として今まで以上に帝国主義的な覇権を求めようとする姿を示しており、また「一人ぼっち」を訴える弱音は欧米から孤立しつつある状況下でさらに事態が悪化する懸念を表している。こう考えれば、「死」を恐れぬ男というのは天皇を頂点とする大日本帝国そのものを指すことになる。私はその先に待つものが破滅だと予感するから涙する。

2 腹の底と上澄みという対比を考えると、彼には内面の奥深くに人間関係において齟齬を感じる心が潜んでいると思われる。いつもは生活上の習性が前面に出て表に出てこない。しかし娘の涙が上澄みを誘い出したように、時々情念が浮上してくる。その場合は習性が情念の噴出を覆い隠すことで取り繕われている。しかし人間関係における齟齬感が一人ぼっち感の根っこにわだかまっていて、いずれ彼を追い詰めるだろう。米相場取引の上でも得意の絶頂から失意のどん底にひっくり返ることが十分予想できる。彼は全くそのようには思っていないが、彼の抱える闇が彼の失敗を招く、それは死に値することで避けようもなくそこに向かっていく。畏れる準備すらしないうちに「死」に向かうことを思うと私は涙せざるを得ない。

3 以下は奇妙な解釈である。下書きを修正していて気が付いたのだが、彼のおしゃべり好き、他人に対する共感の乏しさ、そして急に語られる一人ぼっち感など語りの至る所に自らの性格をさりげなく語っている。語られる性格をまとめれば循環気質性格の特徴なのである。彼は躁状態で喋り続け不意に鬱の様相が表れ、すぐに躁の状態に戻る。実際の病態としてこんなに早く入れ替わることはないが、元気な彼が急に表れた鬱を覆い隠したのだと解釈できる。私は彼のこのような気質に気がついて、やがて鬱が前面に出てくる時のことを考えると暗澹とした気持ちにならざるを得ず、思わず涙を流すのである。こうした制御不能ともいえる気質を抱えながら生きる彼は比喩的に言えば「死」を恐れぬ男である。彼の一方的な語りを聞き役に徹して不可解な気分であった私は彼のいわば闇に気づくと、合点がいつてほっとしたのである。

この読み方は病跡学的な見方に基づく。そして、少しずつ萌していた有島自身の鬱の気配が反映されていると見る。

※ 『カインの末裔』の仁右衛門と比較する予定だったが、確実な裏付けを持って語るための準備ができなかった。羊頭狗肉の誹りは甘んじて受けたい。